

JAPAN GOLF ASSOCIATION

JGAGolf Journal



世界アマチュアゴルフチーム選手権を終えて 平山伸子 JGA 理事インタビュー

インタビュアー：三田村昌鳳 (JGA オフィシャルライター)



52年ぶりに開催された世界アマチュアゴルフチーム選手権(以下、世界アマ)が、数多くの企業・個人の方々に協力をいただき、無事に終了した。この国際大会開催にあたっては、実は、通常の国内イベントとは大きな違いがあった。結論から言えば、本選手権主催のIGF(国際ゴルフ連盟)、出場した各国からも高い評価を得ることが出来た。

けれども、実は、ここまでたどり着くプロセスの中では、開催直前まで、とてつもない時間と労力が払われたことは言うまでもない。

とりわけ、今回の世界アマに関して、IGFの基本的な見方は、オリンピック競技としてのゴルフイベントを大前提としてのスタンスを持っていたことであろう。言い換えれば、言葉はきついけれど、2020年東京五輪で日本にどの程度任せることが出来るのか。またIGFでも、オリンピックに向けての試金石として、様々なチェックとシミュレーションを行ったと推測される。

その前提を理解したうえで、日本サイドの実質的なコーディネーターと運営に携わった平山伸子理事に聞いてみた。

— 52年ぶりにホスト開催となった世界アマが無事に終了しました。

平山 世界アマを日本で開催することが決まって、無事に皆さんが出国されるまで、長いようで短かったです。世界で一番の大規模な大会をホストとして迎えたわけですが、この世界アマ開催には、多くの方々のご理解とご協力をいただきました。選手関係者の宿泊・催事などをご担当いただいたプリンスホテル、会場の軽井沢72ゴルフ、国内外の交通手配をご担当いただいた西武トラベル、協賛、寄付をいただいた皆様、運営会社、ボランティアの皆様…全ての方々を挙げることはできませんが、この場を借りて、本選手権の開催にご協力をいただいた皆様に心から感謝を申し上げたいです。

— それだけ多くの方々にご協力をいただいた世界アマですが、ホストのJGAで平山理事が担当と決まった時の感想は如何でした？

平山 「え？」という驚きが大きかったのは事実です。

2001年に太平洋御殿場で開催されたワールドカップでの経験はありましたが、世界アマを視察したこともありませんでしたし…途方にくれました(笑)。

— (世界アマの準備は)具体的に、何時頃からスタートしたのですか？

平山 ちょうど1年前からですね。実際に稼働したのは、2014年に入ってすぐからです。軽井沢72ゴルフ東で開催は決定していましたから、さて、これだけの大勢の選手、関係者の受け入れ、移動方法や宿泊、料金設定、様々な催事、36ホール準備、IGF総会について細かな打ち合わせを進めました。自分が心に決めたことは、海外から来日する選手と関係者に「日本は良かった。楽しかった」と好印象をもって帰ってもらおうことでした。

— 世界アマを終えて、ワールドカップのときとの違いみたいなことは？

平山 ワールドカップの場合は、プロフェッショナルゴルファーの試合で予算規模も違うし、世界アマはアマチュアゴルファーの試合です。イベントとして魅せるという観点よりも、ホスト国として、しっかりした競技を行い、来日される選手や各国の関係者の方々に、適切なおもてなしをするためにはどうすればよいのか。その準備が大変でした。例えば、食事の面。料理の素材の明示の徹底とか、通常よりかなり早い朝食のスタートとか。IGFからは、基本的にはホストに任せるといっていましたが、出来るだけ不便の無いように対応するようにということも言われていました。各レストランの朝食、昼食、各パーティーのメニューは何度もやりとりをしました。

— IGFからの要望というのは、かなり細かったと聞いていますが？

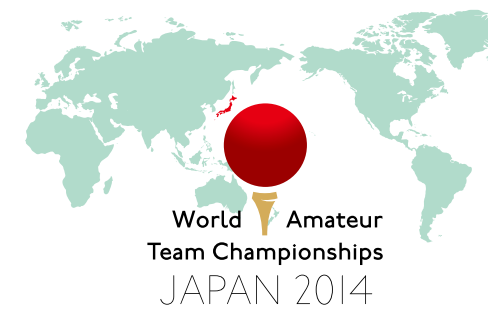
平山 世界アマは隔年開催で、その都度ホストが変わります。世界中のどこで世界アマを開催しても、IGFとして求めるクオリティーを保つという意味もあるかとは思いますが、開催に向けたぶあつマニュアルがあります。それは200ページにのぼるもので、それに沿って準備を進めていきました。それでも、マニュアルだけで大会が運営できるわけではありませんから、疑問点やIGFの要望とホストとしての対応についての摺り合わせは、非常に重要でした。

— そのすり合わせ作業はどのように？

平山 基本的には大量のメールでのやり取りでしたが、IGFと電話会議も毎月行っていました。IGF担当者がスイス、USGAはアメリカ、R&Aがスコットランドですから、ホストの日本を含めて4か国の担当者による電話会議です。各国の時差もありますから、早朝や夕方から深夜にかけて、資料を広げながら、細かな調整を進めていきました。日本はだいたい夕方終わると夜になっていて全員へとへとに。それでも足りないことは個別の電話でした。

— 世界アマは男女別々の開催です。男女毎に開会式、閉会式を挙行したり催事も多かったわけですが、そのあたりの苦労は？

平山 過去の世界アマでは開会式は屋外でした。今回の世界アマから男女とも練習日を4日間から2日間に変更した関係もあって、その2日間で選手たちにしっかり練習してもらいたい。催事の関係で練習ラウンドを切り上げるようなことが無いようにというIGFの考えもあって、日照時間の関係もありますから、開会式は夜になるだろうと。それならば、日本では屋内にしようとなったわけです。そこはマニュアルを超えた対応を求められたわけです。私どもは、マニュアルに沿って屋外で準備を進めてきたわけですが、屋内でとなると、女子は50～60チーム、男子は最大で72チームが参加する世界アマの開会式に出席する方々を収容できるだけのスペースを準備しなければならない。急遽、担当者とプリンスホテルとも相談して、準備を直しましたが、やはりIGFも現場を見なければ詳細は詰められないわけです。そこで、IGFの催事担当者が来日されてすぐに現場で摺り合わせをして…意見調整まで苦労はありましたが、ホスト側の熱意というか細部にも気を配っている一生懸命なことを理解してもらって、催事の担当者とはおかげさまで途中から両者の信頼関係が生まれました。驚いたことは、開会式や閉会式のリハーサルにIGF会長のピーター・ドーソン氏が立ち会われたことです。選手の導線や来賓席からステージがどのように見えるか、ご本人が確認をされる姿を見て、IGFとして世界アマの大切さ、責任を持って進めていく姿は、強い印象として残りました。



— そのほかに日本との違いは感じました？

平山 競技でいうと、世界女子アマでは雷雲が接近して競技中断がありました。その時の中断の判断は、日本に比べてかなり早いと感じました。しかも気象予報士を練習日から大会本部に常駐させるというのは初めてのことで驚きましたね。選手や関係者はもちろんのこと、ギャラリーの方の安全を確保するために必要な時間がどれだけかかるのか？それを考えてのことだとは思いますが、コース内にいらっしゃる方々への告知のタイミングも早かったです。

事前の避難計画の考え方も日本とは異なって、避難するポイントはIGFと日本と同じなのですが、そのポイントに常に収容人数も考えて車を常時、配車しておく、しかも36ホールとなると車と人の手配が一苦勞でした。やはり、主催者として何かあった時のために、全ての対応を万全にしたいということだと思います。

もうひとつはセキュリティですね。IGFからはゴルフ場の警備方法についての要望が強くて夜間警備の徹底の要求もありました。色々な国で世界アマを開催しているわけですから、保安上の不安を払拭したいのでしょう。さらに、大会中に不測の事態が起こらないように、それはホテルも含めての安全を確保したいということがあったかと思っています。日本では考えられないようなことですが、政情不安な国もあるわけですし、トータルな面で危機管理を徹底するという意識は高かったです。

— それは、やはりオリンピックを意識してのことですか？

平山 そう思います。IGFもオリンピックでゴルフが実施競技に決定してからオリンピック開催国で世界アマを開催するのは、日本が初めてとなります。そういう意味で、この世界アマはオリンピックを強く意識して、様々なチャレンジをしていると感じました。IGFはIOC(国際オリンピック委員会)のIF(国際ナショナルフェデレーション)ですから、これまでのIGFの枠組みを超えたものをIOCから求められていると思います。危機管理はもちろんですが、世界アマでのサステナビリティについても、IGFからレポートの提出を求められました。そのほかにも、世界アマのエントリー方法をオンライン



IGF会長 ピーター・ドーソン氏。

化するなど、IGFも試行錯誤をされているなどと思いますし、一方ではIGFとしての役目としてレガシー、ゴルフの正しい普及のために大会を開催することにより効果を出す、足跡を残すというような非常に難しい課題も出されました。

— IGFもオリンピックに向けたシミュレーションを行ったということですか？

平山 そうですね。IGFとして世界アマでは初めて取り組んだことがあると思います。その中では、初めから上手く稼働するものもあれば、課題もあったかと思いますが、そのチャレンジの場となった世界アマをホストとして迎えて、滞りなく終了できたということ。すべてを終えてIGFの方から「これでもう2020年は心配ないですね」と言ってもらえる対応が出来たことは、JGAとして日本としても大きな財産になったと思います。また2020年に向けてIGFとの関係を深められたことは良かったです。最初はいささかの対立もありましたが、それを乗り越えて信頼が生まれ、最後は友情で終わったと思います。

— リオと違って、東京五輪は2020年まで時間があります。そういう意味では、世界アマの開催はJGAにとっても有意義であったといえますね？

平山 そう思います。これからオリンピックに関わる方々にとって、全てではないとしても、オリンピックのスタンダードというものを意識することが出来ました。IGFが求めていること、考えていること……セキュリティや食事などは、実際に経験しなければわからないことです。それをこの時期にJGAが経験できたことは貴重ですし、東京五輪に向けて大きな一歩を踏み出したのではないかと思います。



大会開催前に軽井沢で行われたBIENNIAL MEETINGの様子。

— 2020年東京五輪に向けての試金石となった世界アマですが、残念ながら日本国内ではプロモーション不足だったと思います。つまり、「世界アマってやっていたの？」ということから、取材に来ている記者も「何故もっと早くパブリシティをしなかったの？」という疑問があったのですが、そのあたりは如何ですか？

平山 確かに、プロモーションという面では歯がゆいものがありました。タイムリーな情報を提供したいと思っていましたし、世界アマを日本で開催することの意義をPRしたいと思っていましたが、なかなか難しい面もあったのは事実です。情報収集と発信方法についての課題が残ったと思います。現在では、プロの世界大会であればメディアも取り上げやすいかと思いますが、アマチュアの世界大会は、ゴルフに限らずメディア露出は限られてしまいます。その中でも、例えばSNS(ソーシャルネットワークシステム)をもっと有効に使って、ゴルファー個人に情報を届けることも可能でした。そういった新たな情報発信ツールの有効活用は、JGAとしての課題でもあると思います。それでも、三田村さんと小川晴也広報委員長に協力いただいて実現することが出来たインターネット放送は、IGFも大変喜んでいただけました。世界アマ創始以来、初めて男女とも4日間生中継でインターネット放送を英語と日本語の2局で実現できたこと。インターネットなら参加国全ての人々が自国からも見ることが出来ると思って挑戦して、本当に皆様のご協力によって出来ました。それには岡本綾子プロや服部道子プロ、東尾理子プロ、青木功プロ、中嶋常幸プロにも出演いただきましたし、数多くのゲストの方にボランティ



世界アマチュアゴルフチーム選手権表彰式の様子。

アでご協力をいただきました。IGFからも高い評価をいただき、「今回の大ヒットだったね」とも言っていただきました。

— 世界アマのメディアセンターもUSGAの広報担当がIGFとして取り仕切っていて、日本のメディア対応とは違うと感じた部分があります。日本メディアは、世界アマという大会よりも選手中心の取材。やはり注目選手が出場した女子が大きく取り上げられました。

平山 IGFとして、世界アマをこうやって広報するという高い意識を感じたのは事実です。“世界アマにこういう選手が出場しています”、“トップに立ったチームは、日本のメディアが取り上げようが取り上げまいが、IGFとして記者会見をします”という姿勢。それも、IGFのスタンダードを垣間見た点のひとつかもしれません。

— とりあえず、滞りなく世界アマを終えて、これで2020年東京五輪の運営などに関しての第一関門のテストは無事に通過した、ということですか？

平山 反省点も含めてではありますが、その通りだと思います。世界アマで得た経験はJGAにとって大きなものだと思います。IGFとのリレーションシップを深めることが出来ましたし、IGFがオリンピックの開催国に望んでいることははっきりしてきました。今後は、世界アマで明らかになった課題をどうやって改善していくのが重要だと思います。JGAがこれだけ多くの貴重な経験をする事が出来た世界アマを成功裏に終えられたのは、本当に多くの方々、企業各社のご協力のお蔭ですから、改めて皆様へ感謝を申し上げます。私自身、こういう機会を与えていただき、感謝しています。

— ありがとうございます。

適合クラブでフェアプレー

(公財)日本ゴルフ協会 規則委員会・用具部会



不適合クラブを使用してプレーすることは、「ゴルフ」への敬意を失うことになります。ゴルフ用具がゴルフ規則に適合しているかどうかは、JGAホームページで各種リストを確認するか、そのメーカーに直接お問い合わせください。

本当の意味での「ゴルフ」

みなさんはゴルフ用具にも規則があることをご存じでしょうか?ゴルフをプレーするときに使用する用具についても規則が存在します。クラブについては、その長さ、ヘッドの大きさや形状、フェースの溝、反発力(SLE)や慣性モーメント(MOI)、グリップの形状などの規定があり、球についても、重さ、大きさ、球としての対称性など、さらにはティーや手袋などの用具についても、多くの規定が定められています(付属規則Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ参照)。

ほとんどのメーカーはゴルフ規則に準拠した製品を市場に供給しており、規則で認められている範囲内で多種多様な用具をゴルファーが任意に選んで使うことを可能としてくれています。そのことはゴルフの魅力のひとつでしょうし、メーカーの技術開発と創意工夫がこれまでのゴルフの発展に大きく貢献してきたことは間違いなくでしょう。

一方で、日本国内に目を向けたときに、一部のメーカーは意図的にゴルフ規則に不適合である用具を製造・販売しています。新聞や雑誌の広告などでは、その用具が規則に不適合であることを強調してその商品をアピールしているようなメーカーも存在します。なぜそうしたことをするのでしょうか?様々な理由があると考えられますが、不適合であることが分かっている用具を使ってゴルフをプレーするゴルファーが存在していることが大きな要因であると思われます。需要がなければ、メーカーは敢えて規則に不適合である用具を製造・販売することはしないはずですが。

一見しては分からない不適合の用具を使ってゴルフをプレーすることは可能でしょう。そうした不適合の用具を使うことで何らかのメリットがあると考えられるのかもしれませんが(例えば、ドライバーの飛距離が伸びたり、ウェッジでより多くのスピンのかかったり)。しかしながら、それでは本当の意味で「ゴルフ」をプレーしていることになりません。



「ひとつのゲームにひとつの規則」、それがゴルフの伝統であり、最大の強みである。



ゴルフ規則は世界共通。英国スコットランドのR&Aルールズリミテッドと全米ゴルフ協会(USGA)が共同で制定しています。JGAからもアドバイザリーメンバーを派遣し、4年に1度改訂される規則への提案などを行っています。JGAでは、そのゴルフ規則を翻訳し、日本語版の「ゴルフ規則書」と「ゴルフ規則裁定集」を発行しています。

ゴルフ規則の第一章は「エチケット」であり、エチケットとマナーを守ってフェアにプレーすることはゴルフの不可欠な要素です。ゴルフ規則に適合する用具を使用するかどうかという選択は、エチケットとマナー、プレーの規則を守ってプレーするかどうかという選択と同じことです。また、ゴルフは自己規律のゲームであり、「ゴルファーはみな誠実であり、故意に不正をおかす者はいない」ということが基本的な考え方となっています。用具についてその適合性をラウンド前に第三者がチェックするという習慣がないということは、ゴルフをプレーする時にゴルファーが意図的に規則に不適合の用具を選んで使うことは想定していないということを意味しています。

ゴルフは何百年にわたってプレーされ続けてきており、今では世界中の200ヶ国を超える国々でプレーされています。ゴルフをどのように、どんな用具でプレーするのはゴルフ規則で定められており、その適用について年齢、性別、体力、技量などによる区分けはありません。「ひとつのゲームにひとつの規則」、それがゴルフの伝統であり、最大の強みであると考えられています。2020年東京オリンピックでは正式種目としてゴルフがプレーされますが、この「ゴルフ」も世界統一のゴルフ規則にしたがってプレーされ、規則に適合する用具でプレーされることになります。

ゴルフ場に行ってもどのようなゲームをするのかはゴルファーの任意の選択である以上、「自分は飛距離の出る違反クラブでプレーする」など、意図的にゴルフ規則を無視してプレーすることを選択するゴルファーの声をよく聞きますが、その方は、それはもはや「ゴルフゲーム」ではなく、ハンディキャップも取得できないということをご存知なのでしょうか。ご存知であれば何も言うつもりはありませんが、ゴルフ用具にも規則があることを知らなかった、競技会には出ないから関係ない、あるいは仲間内の遊びのゴルフであればかまわないとの解釈をしているゴルファーがいるとすれば、私たちは日本のゴルフの統轄団体として「用具も含めてゴルフ規則にしたがってフェアにプレーすることの意義」を再度問いかけたいと思います。

ゴルフがプレーされている世界中のどの国においても、競技会でプレーするゴルファーだけではなく、レジャー(娯楽)としてゴルフプレーを楽しむゴルファーに対しても、ゲームの精神を正しく理解し、ゴルフへの敬意を払い、エチケットとマナーを守って、プレーの規則を順守するのと同様に規則に準拠した用具を使用してフェアにプレーすることが期待されています。



ゴルファー一人ひとりがゴルフの伝承者であり、みなさんは将来の日本のゴルフがどのようにプレーされているのかに大きな影響力を持っています。ぜひ、用具についても規則があることを知り、エチケットとマナーを守り、プレーの規則にしたがってプレーすることと同じく、規則に適合する用具を使用することは「ゴルフ」の一部であることを再認識していただきたいと思います。そして、次の世代へゴルフ本来の魅力を伝え、日本のゴルフのさらなる発展へのご協力をお願い申し上げます。

ゴルファーのみなさん、「ゴルフ」をしましょう。

スロープシステムを活用すれば ゴルフの楽しみ方が広がる

新たなJGAハンディキャップシステム(USGAハンディキャップシステム準拠、通称スロープシステム)が導入されて1年が経過した。現場ではどのような効果が表れ、どのような課題が生まれているのか。6月からクラブ競技でスロープシステムを採用している賀茂カントリークラブ(広島県)の中谷崇男社長と緒方俊平競技委員長に聞いた。

【ハンディキャップの歴史】(概略)

年代	欧米	日本
17世紀後半	HDCPの概念広まり始める	
1900年頃	英国女子連盟が初のCR開発	
1911年	USGAが初めてCR導入(全米アマ優勝者のスコア)	
1920年代~	全米各地区でHDCPシステムの改善案考案	1950年代 JGA HDCP制度導入(USGA制度を参考に開発)
1960~70年代	USGAが障害難易度査定法を考案 現行HDCP制度の基礎完成	1978年 現行JGA制度施行(USGA制度を参考に開発)
1979年	USGAがスロープシステム開発着手	
1987年	USGAがスロープシステム正式施行	
2010年~	現在世界61の国と地域で採用	2010年 スロープ導入決定(USGAとJGAが正式契約締結)
2014年~		スロープシステム施行(USGAハンディキャップシステム準拠)

CR=コースレーティング



スロープシステムの導入について語る中谷社長(左)と緒方競技委員長(右)

— まず、スロープシステムを導入した経緯をお聞かせください。

緒方 JGAがスロープシステムを採用すると知った時、これは絶対に賀茂CCでも導入すべきだと考えました。なぜなら、最も公平なハンディキャップ(以下HDCP)だからです。私は以前、アメリカでプレーした時にスロープシステムを知り、日本よりずいぶん進んでいるなと感じました。しかもHDCPインデックスを持っていれば世界共通の区分で楽しめる。そのような経験があったから、すんなりと「これはうちでも導入すべき」と判断できたのです。

— 最も公平だと感じたのはどのあたりでしょう。

緒方 たとえば130ヤードで池越えのパー3があるとしましよう。上手な人はこの程度の距離なら池はそれほど気になりません。しかし、HDCP30程度のプレーヤーにとっては大変なプレッシャーになる。スロープシステムは、ゴルファーのそのような気持ちを反映させたものだと思います。だから、誰もが公平に楽しむことができる非常にいい制度なのです。我々がしっかりと内容を理解し、普及を推進させてこそ、みんながプレーを楽しめ、クラブがより発展すると思えました。



賀茂CCクラブハウス内に掲示されているJGA発行のコースハンディキャップ換算表。スロープシステムなら大人数の男女混合競技で、しかも男女が別々のティーからプレーした場合でもそれぞれのプレーヤーに適正なHDCPを用いることができる。

— スロープシステムを会員に周知させるためにどのような活動を行いましたか。

中谷 まず競技委員会などクラブ内の各委員会で協議しました。最終的に競技委員会で決まった事柄をクラブの月報に掲載し、クラブハウス内でも同様のお知らせを掲示しました。また、競技では当日、改めて出場者に説明し、理解を深めていただくという取り組みをしてきました。

— 導入にあたって反対意見はありましたか。

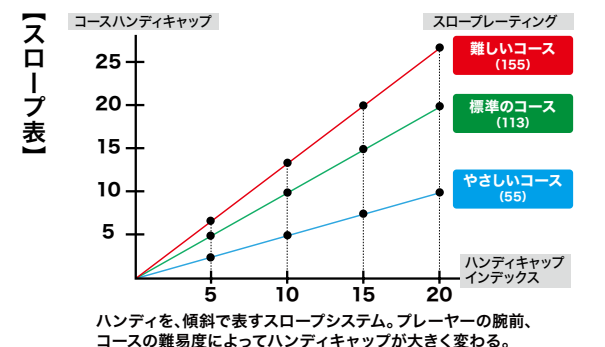
緒方 いろんな意見を言う会員はもちろんです。「全責任は競技委員長である自分が持つ」という固い決意で臨みました。反対の立場の会員に個別でスロープシステムの良さを説明し、「これこそみんなが楽しめるHDCPなのだ」と訴えて理解を得たこともあります。ただ、それほど大きな障害はなかったと思います。

中谷 総務委員会で「混乱するのではないか」という懸念の声もありましたが、「一流のコースは一流のルールを採用する」との観点から比較的スムーズに導入が決まったと感じています。その背景にあったのは、9年前にJGAHDCPを採用していたことです。

— どのような苦労があったのですか。

中谷 日本アマなどに出場するにはJGAHDCPが必要ですが、JGAHDCPを採用していないクラブは、別途JGAHDCPを計算し、プレーヤーに付与しなければなりません。つまり、1人のプレーヤーがクラブHDCPとJGAHDCPの2つの数値を持つことになるわけです。しかし、原則としてHDCPは1人のプレーヤーに1つであるべき。そこで、賀茂CCでは平成17年にJGAHDCP一本に絞ったのです。

緒方 賀茂CCにとっては大きな転機でした。クラブHDCPに愛着のある会員が少なくありませんでしたから批判はありました。それでも、やはり1人のプレーヤーに2つのHDCPがあるというのはHDCPの精神に反すると考えたのです。JGAHDCP導入に際して賀茂CCではクラブハウスに掲示されているメンバーズボードからHDCPを外し、並びもHDCP順から五十音順に変更しました。いわゆるシングルの会員は、メンバーズボードのひとつの数字のところに自分の名前があることが、ひとつのステータスです。賀茂CCは難易度が高く、「9」になるための査定を厳しく設定していましたから、なおさらシングルHDCPは名誉だと考えられていました。ですから「やっとならなくなったのになぜそんなことをするのか」という反発は少なくありませんでした。「クラブHDCPとJGAHDCPを併記すればいいだろう」という意見もありました。そのような意見には粘り強く説得し、最後は理解を得られたのですが、この時の経験があったので今回は大きな混乱は起こらなかったのだと思います。



— クラブHDCPへの愛着が強いと、どうしても新しいものを受け入れにくいのでしょうか。

緒方 私はクラブHDCPを否定したり排除したりしようとは思いません。なぜなら、それが日本のゴルフの文化だからです。ただ、日本の文化は尊重しながらも、いいものは取り入れていくべきです。しかし、性急にあるいは強引に新しいものに移行させるのはよくない。いらぬ軋轢を生むだけです。じっくりと年月をかけて納得してもらうことが必要です。クラブHDCPは柔道の段位のように一度手にしたものは落ちないという性質があります。つまり、ベストの時代のHDCPがいつまでもそのプレイヤーの肩書になるということです。これに対して、スロープシステムは今の自分の腕前が如実に反映されるわけですから、かつてはHDCP5や6だった方が15くらいになる例はいくらでもあるでしょう。実際に「オレは6だったのにHDCPインデックス15ってどういうことだ」と文句を言う方はいます。「“HDCPはおいくつですか”と聞かれたら何と答えればいいんだ」と。このような方は、ベストの時代のHDCPに価値観を見出しているのです。これは否定すべきものではありません。私は「昔は6でしたと言えればいいでしょう」と答えています。JGAHDCP導入時も今回のスロープシステムの導入に際しても、このような価値観の違いをどう埋めていくのかが一番のポイントだったと感じています。



— 価値観の違いを埋めるために大事なことは何でしょう。

緒方 スロープシステムへの移行に抵抗があった会員の多くは、どのようなシステムなのかを理解していないという面がありました。「こんなに公平なHDCPなのだ」ということを丁寧に説明すれば「そういうことだったのか」と理解を示してくれることがほとんどです。



中谷 知ってもらうということが一番大切な作業ですね。

— 6月からクラブ競技に採用されたということですが、何か変化はありましたか。

中谷 クラブ競技では70歳以上のグランドシニアと一般男子は別々のティーを使用しています。従来のJGAHDCPではティーごとのHDCPがないため別の部門として開催せざるを得ませんでした。それがスロープシステムの導入で別々のティーでも公平なHDCPで同じ競技としてプレーできるようになったのです。これは大きな変化だと感じています。

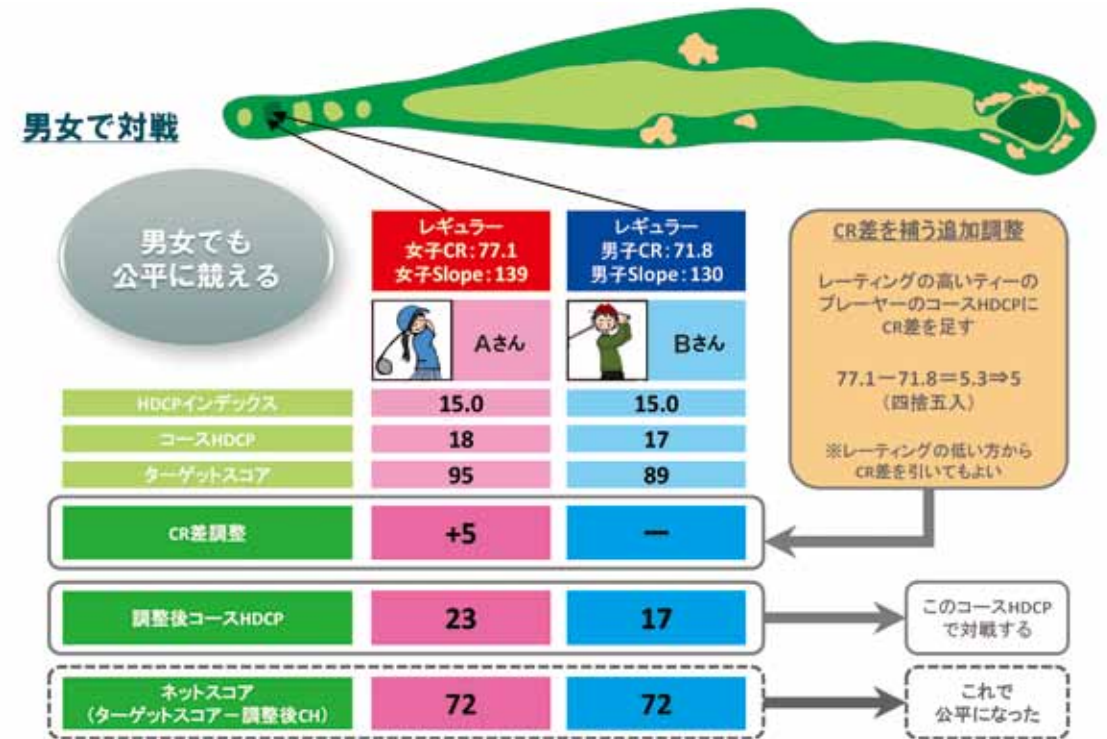
緒方 グランドシニアの部は参加人数が少なく、競技として成立しない場合もありました。その悩みが解決されたことは競技委員会としてもうれしいですね。

中谷 女子も含めて3つのティーで公平にできますからね。しかも、スロープシステム導入後はまんべんなく入賞されるようになりました。

— つまり女性やグランドシニアの方の入賞が増えたということですか。

緒方 入賞者の顔ぶれは大きく変わりましたね。やはりHDCP2や3といった高いレベルのプレイヤーは、どのような条件でもスコアをまとめてくるわけですよ。しかし、アベレージクラスでは、そうはいきません。ですから、競技で上位にくる顔ぶれは、ある程度決まっていたのです。それが、スロープシステムを導入してから女性が優勝したり、年を取って入賞から遠ざかっていた方が上位に入ったりという変化が出てきています。これは本当の意味で公平になったということの証明だと思っています。「どうせ上手い人にはかなわない」と思っていた会員も、が然やる気になってきた。喜んでもらっています。

【スロープシステムの使い方】 女性Aさん・男性Bさんが対戦した場合



CR=コースレーティング / CH=コースハンディキャップ

— 課題や問題点についてはいかがでしょう。

中谷 会員の意見の中に「毎月更新されるから自分のHDCPが覚えられない」というものがありました。以前は4カ月に一度の更新で、その都度会員個々にハガキで通知していたのですが、現在はそれを辞め、一覧表をプリントしてクラブハウス内に掲示している形です。また、J-sysを各クラブで運用していく上でより便利なスタイルを形づくっていただければ、もっと普及していくのではないかと感じています。

緒方 私は、将来出てくるかもしれない問題点の対策を考えておかなければならないと思います。いくら素晴らしい制度であっても、運用していく中でどこか問題点は出てくるはずですから。たとえば、公平になったがためにかつては上位の常連だったローHDCPのプレイヤーが入賞できなくなり、逆に不公平だと感じる場合もあるということ。JGAにはそこまで読んで対策を考えておいていただきたい。また、スロープシステムやHDCPインデックスという言葉自体があまり浸透していないように思います。一般の方には馴染みがない言葉だからではないでしょうか。もっとシンプルで分かりやすい呼び名を考えてもらいたいですね。スロープシステムは誰もがゴルフをより楽しめる素晴らしいもの。私はもうすぐ70歳ですが、スロープシステムがあれば年をとっても公

平なHDCPで胸を張って楽しめると思っていますよ。スロープシステムが定着すれば、日本のゴルフは大きく進化すると思います。ただし、一気に変えていくことは難しい。実際、広島県でスロープシステムを採用しているのはまだ3クラブだけです。JGAには丁寧に説明していく努力を今後も続けてほしい。5～6年程度の長い時間をかけてじっくりと取り組むつもりで、強力で正しいリーダーシップを発揮してほしいと願います。

— 本日はありがとうございました。

